史跡払田柵跡（第 154 次）発掘調査資料

第 154 次調査地近景

調査地の位置（1/50000 地形図）

1　調査要項

所　在　地	秋田県大仙市払田字館前 73 ほか
遺 跡 状 況	休耕田
調 査 面 積	210 ㎡
遺 跡 時 期	平安時代
遺跡の性格	城柵官衙遺跡
調 査 目 的	遺跡内容確認
調 査 期 間	令和２年６月１日～11 月 18 日
調査主体者	秋田県教育委員会
調 査 担 当	秋田県教育庁払田柵跡調査事務所 文化財主査　谷地薫、文化財主査　髙橋和成
調査総務担当	副主幹　柴田卓也、副主幹　柴田優、主事　渡辺昴
調査協力機関	大仙市教育委員会、美郷町教育委員会

2　検出遺構と遺物

検　出　遺　構		主　な　出　土　遺　物	
平安時代	溝跡１条　竪穴建物跡１棟　打込み杭１基 柱穴様ピット１基	縄文時代 平安時代 近世～近代	石器 土師器　須恵器 陶磁器

3　調査のまとめ

史跡払田柵跡は、律令国家が本州の北部を支配するために設置した行政、軍事、祭事を司る城柵の一つです。平安時代の９世紀初め（801年ごろ）に造られ、10世紀の後半まで存続しました。

遺跡は沖積地に残る真山、長森という二つの低丘陵を大きく取り囲む外柵（材木塀）と、長森だけを囲む外郭線（築地塀と材木塀が連結）に囲まれています。外柵は、東西1,370m、南北780mの楕円形で、外柵内の面積は878,000㎡です。外郭線は、東西765m、南北320mの楕円形で、外郭内の面積は163.000㎡です。外柵、外郭線ともに東西南北に八脚門がつきます。長森の中央には主要な施設である政庁があり、板塀で囲まれています。

昭和５年に最初の調査が行われ、昭和６年に秋田県初の国指定史跡となりました。昭和49年度からは秋田県が継続的に発掘調査を行っています。

第10次５年計画（令和元～５年度）の２年目に当たる第154次調査は、外郭西門の南側、真山と長森にはさまれた、沖積地で行いました（①）。

これまでの調査で、外郭南門の南西部では外郭線の外側に幅３～４ｍの大溝が掘削されていることを確認しています。この大溝跡は、外郭線の材木塀に沿って東西方向に延びており、昨年度の第153次調査までに外郭南門付近から西に約206mの地点まで検出されていました。

第154次調査では、この大溝跡がさらに西側にどのように延びているのかを確認することを主な目的としました。

調査の結果、これまでに検出していた最も西の地点からさらに約157m西で、真山と長森の間を南北方向に流れる小河川に接続し開口していたことが分かりました。ここが大溝跡の西端と推定されます（②・③）。西端付近の推定幅は約４ｍ、現存する深さは約50cmです。外郭線材木塀との間隔は約26mで、これまでに検出していた最大の間隔よりも約10m広くなっています。長森南側で検出した大溝跡の総延長は約363mとなりました。

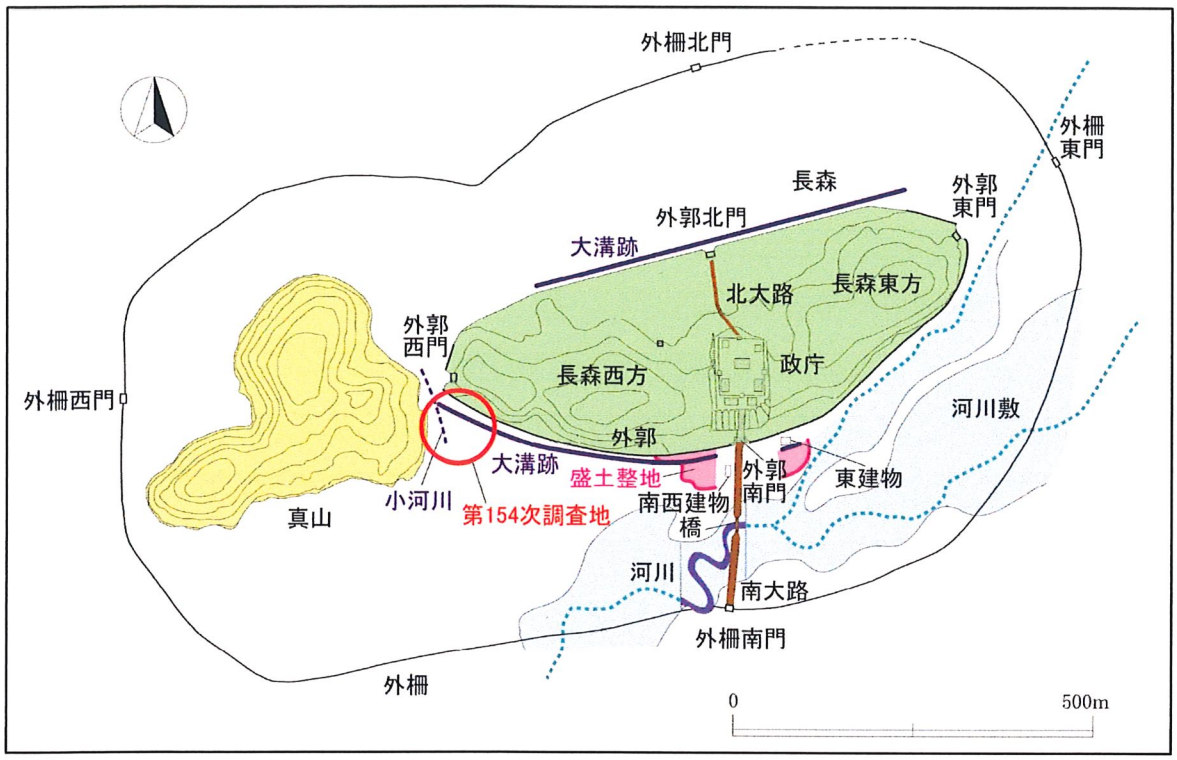
大溝跡も小河川も同じ泥炭質の粘土で埋まっており（④）、その上位には十和田ａ火山灰を含む層がありました。火山灰降下時

点ではどちらもほぼ埋まっていたようです。大溝跡は、真山と長森の間で、長森の丘陵裾部に設置された外郭線材木塀に沿って北西方向に向きを変えており、外柵のように真山を取り囲むものではないことも確認できました。

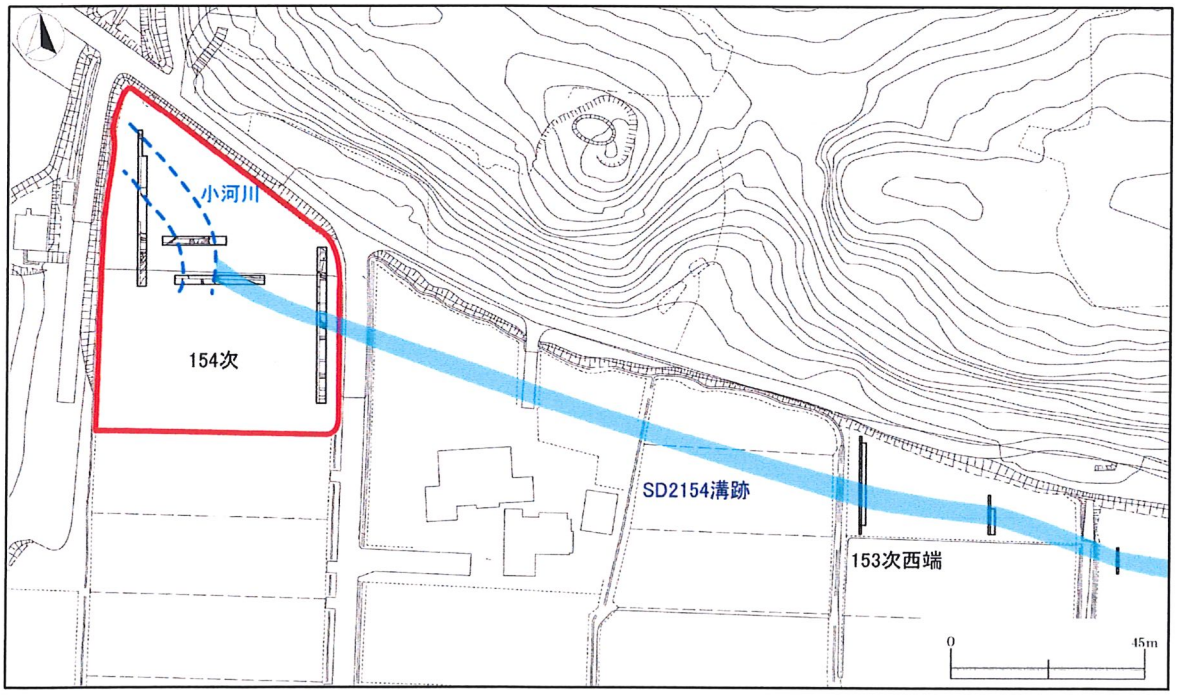
なお、真山と長森の間の沖積地は、全体が湿地となっているのではなく、真山の南東側一帯は真山から続く堅固な地盤となっていることが分かりました。この地盤の面では、竪穴建物跡と推定される遺構（⑤）や直径約 25cm の丸太を半分に割って垂直に打ち込んだ杭（⑥）等を検出しました。

また、平安時代以前から近代まで、頻繁に流路を変えながら真山と長森の間を南北ないし南西ー北東方向に流れる小河川が存在していたことも確認しました。小河川の流路によって地盤が浸食されたところは、自然に埋まっていく過程で湿地化しています。小河川の浸食や農地化による削平を受けていないところでは、さらに遺構が残存している可能性があります。

来年度も、大溝跡の西端と小河川の接続状況を平面的にも把握し、小河川と大溝跡が埋まっていく過程等を明らかにすることと、検出した竪穴建物跡等の精査や他の遺構の分布状況を把握することを目的として、この地区の調査を継続する予定です。



史跡払田柵跡の概要図



第 154 次調査遺構配置図と大溝跡の推定位置図